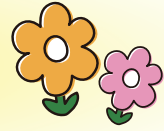




粥川先生

クリニック訪問インタビュー



エッセイ「ちょっとブレイクしませんか?」は2008年7月から毎月掲載され、今号で33回を迎えました。粥川先生ってどんな人??原稿はどうやって書いているの??と粥川先生の素顔に迫るべく寒風が吹く二月上旬、編集委員が名古屋市中区伏見のクリニックへ訪問取材しました!!

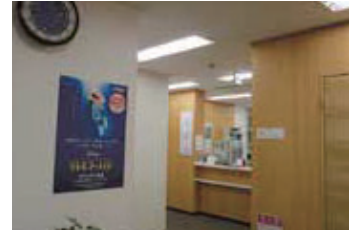
近接にはヒルトンホテルや飲食店が並び賑やかな街のビル内にクリニックはあります。訪問するとスタッフの方々に笑顔でお出迎え頂きました。足を踏み入れると広く明るく落ち着いた室内。コンセプトは、「受診して良かったと思われるのに加えて、待ち時間も寛げる空間を大切にしました」とのこと。待合室にある書籍は粥川先生の蔵書とのこと。楽しんで診察までの合間を過ごせます。



【スタッフの皆さんに笑顔で出迎えていただきました】



【多くの書籍が並び待合室】



【広々とした受付ロビー】

映画を見始めたのは4歳の頃!

—エッセイでは多くの映画をご紹介しますが、映画との出会いはいつ頃でしたか。またどうして医師を志したのですか?

粥川先生:4歳からです。自宅のすぐ近くに映画館がありました。当時いじめられっ子だった私は幼稚園に行かず、毎日映画館で過ごして石原裕次郎の「嵐を呼ぶ男」など日活や東宝映画を一日中繰り返し観ていました。小学校に入ってから学校が嫌いで泣きながら行き、授業が終わると映画館へ直行していました。テレビのない時代でしたから、街の人たちも映画が唯一の娯楽だった時代です。

そんな小学生の頃、膝関節の病氣になりました。外科医であった親戚の叔父のお蔭で元気になった時は、医者が神様のようには思えました。その後も、叔父の診療や周りの患者さんを見ているうちに医師の役割の素晴らしさを感じたことが一因です。学校嫌いな変わり者に、母親から「そんなにだらしなくては普通のサラリーマンは無理。医者くらいしかねないかも」と宣告されたのが一番のきっかけだと思います。それが39年もサラリーマンを続けられたのですから、人生分かりませんね。



生まれつきできる人なんていない。そこには練習がある。

—エッセイはイソップ寓話と映画から構成されていますが、制作苦勞はありますか。

粥川先生:MMEGの皆さんが読んで下さって、一層元気になれることを念頭に、各々の置かれた状況や、ライフステージ、それに発刊される季節などを考慮に入れます。イソップ寓話と映画との共通点を見出すのに容易ではない時もありますが、映画を選ぶ一番は、私が好きな映画であるということです。

実は20歳を過ぎるまでまったく文章が書けませんでした。宿題の感想文なんて全くと言っていいほどです。なにが要点なのかも分からないのです。書くことを始めたのは、当時学生運動が盛んで、自分の気持ちや考えを書面に表現する機会からでした。新聞で連載をしていた時は、編集者から添削トレーニングを毎回受けました。何事も生まれつきでできる人なんていません。皆練習を積んでできるようになるのです。

粥川先生お奨め映画

お忙しい中、現在でも週に1本は映画鑑賞されるそうです。お奨め映画を尋ねるとたくさんありすぎて…と選りすぐりの映画を教えてくださいました。ちなみに大好きな俳優はロバート・デニーロ、メグ・ライアン、メルル・ストリープとのことでした。

- 映画史上では…「天井桟敷の人々」(1945年フランス)
- 打ちひしがれた時には…「ショーシャンクの空に」(1994年アメリカ)
- 若者には…「遥かなる大地へ」(1992年アメリカ)
- 人生中途者には…「フライド・グリーン・トマト」(1991年アメリカ)
- 人生ベテラン者には…「野いちご」(1957年スウェーデン)



粥川 裕平(精神科医・映画評論家)
国立学校法人名古屋工業大学名誉教授
かゆかわクリニック院長
専門分野・精神医学・睡眠医学・
リハビリテーション学・臨床脳波

取材を終えて…

スタッフの皆さんから、「知識が大変豊富で患者さんに優しく、人気の先生です。ご自身で食材から拘り料理をされるという意外な一面もあるんですよ」と教えていただきました。粥川先生に情報検索法を尋ねると「実は患者さんから教えられることが一番多いです。美味しいレストランも良い映画も」との返答でした。「社会的地位とは関係なく、重い人を優先的に診るのが医療です」と医師としての心構えを語られる先生に大変感銘を受けた取材となりました。